

援助者として養成され、教育を受けるなかで色濃く染み付いてしまっているこの中立や客観と言った言葉からどのように脱出できるのだろうか。虐待をはじめとする家族内暴力は、援助者にとってまさに従来の援助観がゆるがせられる問題なのである。これまで疑問なく用いてきた多くの言葉を脱構築しなくては家族内暴力の被害者、被虐待児は救出できないのかもしれない。

## 9. おわりに

本研究においては、虐待における加害者へのかかわりを主たる課題としている。被害者の立場に立たなければ虐待と定義されず、つまり虐待として構築はされない。では被害者の立場に立ったとき、とりあえずの虐待からは分離・保護されたとしても、加害者である親との関係はどのように今後展開されるのであろうか。

ここで同じ家族内暴力のひとつであるDVをみてみよう。暴力によって保護されるべきなのは妻であることは虐待と同じである。ではシェルターに妻が逃げて、離婚すればすべてが解決するのだろうか。それだけでは不十分であることは誰にでもわかるだろう。つまりもっとも困難であり、もっとも根本的な視点「加害者へのアプローチ」こそが求められるのである。アルコール依存症において、酒を飲む本人が断酒することが求められるのとそれは同様である。

北米大陸(カナダ・アメリカ)においては、法律によってDVは犯罪であることが規定され、暴力をふるった男性は有罪を免れるのと引き換えに「加害者更正プログラム」の受講が義務化されている。つまり一定期間のプログラム参加によって、犯罪歴が残らなくなるというシステムである。この方法は20年以上の試行錯誤を経て更新されてきている。

同じ家族内暴力の加害者という点で、虐待する母親・父親へのアプローチとして学ぶべ

き点は多いだろう。そのプログラムの基本的理念は「加害者へのプログラムは被害者支援の一環である」というものである。両者が別なものではなく、被害者の立場に立つという点ではまったく同じなのであるという視点が明確になっている。また「人格を尊重しつつ、行動が変わることを目指す」ということも繰り返し強調されている。

本研究は、虐待する母親支援は虐待を防止するのに必須であり、それこそが子どもの保護・援助につながるという視点に立っている。そして、虐待先進国ともいうべきアメリカ・カナダの実践に学びつつ、わがくににおける独自の方法を探ることを目指している。そのためには、いたずらに母親に対して処罰的になるのではなく、そのひとたちの抱える困難さを承認し、同時に育児行為の変容を促すという多様で輻輳的課題をはらんだ研究・実践が求められるだろう。

民間のカウンセリング機関を実践の場とすることで、育児行動に困難を感じている多様な層の母親を対象とすることができた。方法としては主としてグループを実施した。そして輻輳的課題を解決するために、言語的方法のみならず、行動変容を目指すために心理劇的方法を取り入れることにした。このような母親本人の言語と行為の双方に効果的にはたらきかけていく方法をグループ運営に意識的に導入することで、家族内暴力のひとつとしての虐待が解決される端緒をつかめるのではないだろうか。認識と行為、グループと日常の親子関係、過去と現在、をいま・ここの集団(グループ)において新しく変容させていくための方法をフォーマット化し、プログラム化していくひとつのころみとして本研究が位置づけられることを願ってやまない。

引用文献：

- 1) Foucault, M.: 性の歴史 I 知への意志、新潮社、1986
- 2) Kerber, L.: 憲法は女らしさを保証するか、1998
- 3) J.L.ハーマン：（中井久夫訳）心的外傷と回復。みすず書房、1996

参考文献：

- 1) Adams, D.: Stages of anti-sexist awareness and change for men who batter. In L. Dickstein & C. Nadelson (Eds.), Family violence, Washington DC, APPI Press, 1988
- 2) Adams, D.: Treatment models of men who batter: a profeminist analysis. In K. Yello & M. Bograd (Eds.), Feminist perspectives on wife abuse, Beverly Hills, CA, Sage, 1989 (沼崎一郎訳：DV 加害者男性のための治療モデルの分析—フェミニズムを支持する男性カウンセラーの立場から。アディクションと家族, 18 (4) :499-517, 2001)
- 3) Adams, D.: Identifying the assaultive husband in court: you be the judge. Boston Bar Journal, July/August: 23-25, 1989.
- 4) Bandura, A.: Social learning theory. Englewood Cliffs, NY, Prentice-Hall, 1977.
- 5) Cayouette, S.: Safety issues for female group leaders. Unpublished. Available through Emerge, 2380 Massachusetts Ave, Cambridge MA 02140, 1996.
- 6) Dobash, R.E. & Dobash, R.: Violence against wives: a case against the patriarchy. New York, The Free Press, Macmillan, 1979.
- 7) Emerge: Group interaction, 1998.
- 8) Emerge: Batterer intervention

- program manual for first and second stage groups. Available at Emerge, 2380 Massachusetts Ave, Cambridge MA 02140, www.emergedv.com, 2000.
- 9) 大日向雅美: 母性愛神話の罭、日本評論社、2000
- 10) 小森康永・野口裕二・野村直樹: ナラティブ・セラピーの世界、日本評論社、1999
- 11) 田間泰子: 母性愛という制度、勁草書房、2001
- 12) 信田さよ子: アディクションアプローチ、医学書院、1999
- 13) 信田さよ子: DV と虐待一家族の暴力に援助者ができること一、医学書院、2002
- 14) 信田さよ子: 愛しすぎる家族が壊れるとき、岩波書店、2003

## II 虐待に悩む親との臨床的アプローチによる支援プログラム － V-A クロスプログラムの概要 －

春原 由紀      土屋 明美      信田さよ子      武藤 安子  
(武蔵野大学)   (相州病院)   (原宿カウンセリングセンター)   (横浜国立大学)

### 1. 目的

本研究グループ（分担研究2）では、3年間にわたり、「虐待に対する援助のフォーマット作成に関する研究」として心理臨床的アプローチを適用した実践研究を進めてきた。その結果、虐待に悩む保護者との臨床的アプローチによる支援プログラムのモデルを構築しえたと考えたので、それを「V-A クロスプログラム」と命名し、「援助のフォーマット」として報告することにした。

「V-A クロスプログラム」の理論的基盤についてはIの項で述べた。

本項では、「V-A クロスプログラム」の枠組みとその特色について論述する。

虐待の問題を抱えた保護者への援助プログラムに関しては、1992年から活動を始めたMCG（Mother and Child Groupの略「母と子の関係を考える会」）が先駆的な役割を果たし、現在も地域の保健所などを活動の場として活動を広げている（広岡、2002）。MCGは、「虐待問題を抱える母親がかつて体験したことがない新しい情緒的体験ができるように」、「安全な居場所を提供するもの」であり、幼少時に受けた傷を癒すことを中心課題に、自助グループとしての「セルフケア」を基盤として展開している。したがって、援助者の役割も、「良い聞き手」として「傾聴して受け止めること」であり、母親のワークを「見守ること」と「変化を喜んであげること」を重視している（広岡、2001）。しかし、広岡は、MCGの限界・課題を述べる中で、「親に虐待以外の子育ての仕方をだれが示せるだろうか。虐待をストップさせるためには、親への共感と支持では不十分であ

り、育児教育・指導も必要であることを、私たちは少しおざなりにしすぎていないか。」と指摘している。

一方、保護者の過去や現在への共感よりもむしろ、保護者の子どもへのかかわり方を学習し直していくことを目指した、認知行動療法の流れを受けたペアレント・トレーニングによる保護者支援の実践も見られる（野口、2003）。また、過去の未解決の問題の整理は目的にせず、「セルフケア」と「問題解決力」を高めることを目的に、ワークによる学びと気持ちを語ることによるグループプログラム（MY TREE プログラム、森田、2003）なども展開し始めている。

虐待の問題あるいは子どもとの関係に困難を抱えた保護者への援助活動に関して、①過去の自己が育つ過程の経験に関して、②現在の家族内の人間関係に関して、③これから（未来）の諸関係の担い方に関しての課題を、A.情緒的に、B.認知的に、C.行為的に発展させていこうとするという枠組みでこれらの諸実践研究をとらえると、MCGは①②を主としてAで、ペアレントトレーニングは②③を主としBとCで、MY TREE プログラムは②③を主としてAとCでといった方向性を持つといえる。

本研究グループで行ってきたV-Aクロスプログラムは、過去相・現在相・未来相に成立する諸課題に関してその連関をとらえ、情緒・認知・行為の統合における発展を指向する点で独自性を持つものと考えられる。

## 2. V-A クロスプログラムの概要

### (1) V-A クロスプログラムとは

V-A クロスプログラムとは、1クール・10セッションを、活動形態の異なる2つの方法を組み合わせて展開するプログラムである。2つの方法とは、1つは、語ることを中心としたバーバルセッション(マルチプルカウンセリング multiple counseling)であり、他の1つはふるまいながら気づくアクションメソッドセッション(心理劇 psychodrama)である。自己を語る活動とふるまいながら気づく活動を組み合わせることによって自己の認識・行為・情緒の統合的変容効果が相乗的に高められることを予測し、実践を重ねた。

バーバルセッションは、他者に向かって「自己を語ること」が中心的な活動である。過去から現在相における自己についての語りは、自己のストーリーを書き換えるという作業である。この作業は、他者から認められることの少なかったメンバーが、カウンセラー・集団メンバーという他者から受容・肯定されることによって支えられ、展開する。それは、子どもとしての自分の物語の書き換えであり、厳しい状況を生き抜いてきた自己を認める作業といえる。

また、現在相を取り上げるときには、母親・妻・大人としての現在の自己の語りである。そのとき、カウンセラーは日常生活の中で、出来ていることを強めながら、日常における困難を取り上げていくこととなる。しかし、子どもへの、あるいは他者への実際的なかわりの「質」において多くの課題がとらえられるのも現実である。したがって、肯定的でありながらも、情報を伝えたり、かわりのアドバイスをしたりというカウンセラーの役割の取り方も必要となる。しかし、言語的なアドバイスだけでは実際に子どもとの関係において適切に振舞うためには不十分であり、また安易なアドバイスは、時に出来ない自分への否定感につながる危険性も

ある。こうした課題に応える方法が心理劇といえる。心理劇は、やってみてできる・気づく体験が成立しやすく、それが日常生活につながってみようとの意欲を生み、関係の変容につながる未来志向性が特色である。

また、心理劇の特色のひとつである役割操作が重要な意味を持つと思われる。それは、バーバルセッションで固定されている役割関係を変えらるということである。バーバルセッションにおいては、カウンセラーと参加者という役割関係は固定している。もちろん、プロセスの中で機能的には役割を取り合いながら展開するものではあるが、社会的な役割としては固定しており、固定性は勾配性と認知されやすい。しかし、心理劇では、カウンセラーも一人の演者である。心理劇の中で役割を相互に取り合うことは、バーバルセッションにおいて固定しがちな役割関係を、一人関係(協働関係)へ転換する効果を持つと考える。

### (2) バーバルセッション…マルチプルカウンセリングの集団構造と運営の特色

バーバルセッションはマルチプルカウンセリングの方法を用いて行われている。マルチプルカウンセリングについて松村康平は以下のように述べている。「多面相談法、あるいは多者面談法。グループカウンセリングでは、グループの一員としての来談者およびそのグループの活動が発展するようにカウンセリングが行われるところに特色があり、マルチプルカウンセリングでは、グループにおいてひとりひとりの来談者との活動が、交互に展開される。前者では来談者たちが、場所と時間を主として共有し、後者ではそれぞれを主として分有する。」(1972, 児童学事典)この方法は、メンバーとカウンセラーの1対1の関係を集団状況において重ねて展開する方法である。運営のルールとして、基本的にメンバー間相互の言語的コミュ

ニケーションを行わないことが大きな特色である。

### ＜運営方法＞

1回の活動は以下のような経過で展開される。

1. メンバー各自が1週間の生活の中で感じたことや、その日、話したいと思ってきたことを自由に話す。
2. 話されたことを中心に、メンバーの一人ずつとカウンセラーが話し合う。他のメンバーはそのやり取りを聞いている。(その日の状況によって1周のこともあれば短いやり取りで2周3周することもある)
3. その日のセッションの中で、感じたこと、気づいたことをメンバー全員が一人ずつ話す。

### ＜特色と効果＞

マルチプルカウンセリングの運営は、参加者にとって以下のような効果をもつ(春原, 2001)。

- a. ルール性に守られる。集団の運営方法が固定されており、メンバーの取る役割が決まっていることにより、メンバーは集団に予測的に参加することが可能であり、安定しやすい構造である。
- b. 他者から自己へ向けられる発言がないことは、カウンセラーとの安全な関係において自己を語るができる。自己評価が低く、他者から自己へ向けられる関心を否定的、被害的に受け止めやすいメンバーにとって、カウンセラーとの安全な関係が強められ、他者の介入から守られるなかで自己を語るができるといえる。
- c. 他者のいる中で自己を語るができる。過去から現在にいたるまで、他者が自己を脅かす体験を重ねてきているメンバーにとって、他者のいる中で自己を語るということは、勇気のいる行為である。この集団構造と運営

において、他者という存在が自己を脅かさな体験が成立する。

d. 他者の話を聴く観客体験の中で気づきが成立する。他のメンバーやメンバーとカウンセラーとの会話を聞きながら、自己を振り返ったり、他者に共感したり、自分だけではないことに励まされたりといった気づきが促進される。

e. 自己のあり方を変容する。「あなたは…」という他者に向う発言はできないルールの中で、他者の発言からの気づきは「私は…感じた・思う」という他者に内接しながらも介入支配しない自己表現に変容していく。「感じ、気づく私」を強めていくと同時に他者を尊重し、支配・介入しないあり方を育てる特色を有する。こうしたかかわり方の学習は、子どもを思いどおりに支配しようとしそれが出来ない時の怒りの爆発につながりやすいメンバーにとって重要と考える。

### (3) アクションメソッド…心理劇の集団構造と運営の特色

#### ＜運営方法＞

心理劇の進め方はおよそ次の5段階からなる。課題によっては、第3段階と第4段階を同時に展開する。なお、集団精神療法としての心理劇においては、therapistを「監督」、co-therapistを「補助自我」とよぶ。

#### 第1段階 ウォーミング・アップ

椅子に腰掛けて人の話に耳を傾け、自分を語ることから、身体を動かし、役割を取り、空間を活用して振舞い、自発的な自己を育てることへの準備・移行段階である。日常生活においては何気なく取っている役割を改めて担うことは、自己の意識化が要求されることでもあり緊張感をともなうことでもあり、この段階では自分らしくふるまうことに馴染むことが期待されている。また、現実規定性を超える心理劇では自発的でPlayful(演劇的)な自分を体験することも期待されてお

り、自由な表現を試みる時間とも言える。補助自我の助けを受けながら新しい状況に参加すること、失敗を恐れずに試みたいこと、言ってみたいことなどを演じることが促される。

## 第2段階 ウォーミング・アップの感想、参加目的の提示

自分に成立した感じ・気づいたことで、些細と思われることも含めてこの場の体験を言語化する。続いて、参加の目的を話す。また、パーバルセッションの中から共通のテーマとされたことや、日常生活場面を心理劇で行演してみることが課題として残されていることもあり、それらが提示される。

## 第3段階 共通課題の演習

参加者から提示された課題に関して、演習形式で展開する。目的を明示して、全員が体験できるように運営される。

## 第4段階 個別課題の展開

第3段階を踏まえて、さらに探求したいことについて監督により場面設定がなされて、主演者を中心として進められる。

## 第5段階 感想・ふりかえり

心理劇体験の共有がなされる。最後に監督は場面展開についてのふりかえりを行ない、質問を受ける。

### <特色と効果>

a. グループの仲間と共に「自分（という役割）を演じる」。

役割を演じるといっても、自分とかけ離れた理想の役割やあり得ないことを演じるのではなく「いつものようにしてみよう」という働きかけを受けて自分がいつもしている（と、思っている）ことを演じる。いつもの自分を意識しながらも、心理劇の主人公として仲間の前で自分を演じる。自分を観られているという意識は、体験当初は恥ずかしさなどとしても表出されるが、観客がそのような自分の姿に共感し、「よさ」を見出し伝

えてくれるという体験を重ねることにおいて、現在の自分を肯定的に確認することができる。失敗したと思って落ち込んでいたり、いらいらしていたり、自分を責め続けたりしている自分を「そういうこともあるよね」とまるごとサポートされる。そして、そのように感じている自分はそのまま不変で固定しているわけではなく、変化可能であることを演者体験は教えてくれる。役割という、たとえば言えばある種の洋服を借りて自分を演じることが楽しくなると、日常生活においても自分や他者の感情に支配されずに、余裕をもって人間関係をつなげることが可能になるであろう。また、多様な役割関係を体験することにより日常生活の常識を越える体験がなされる。例えば、「悪い母親」という言葉が行き交ったあるセッションにおいて、主観的・観念的に抱かれている「悪い母親」が演じられ、悪い内にある大切なこと、悪いと判断されることの実態、悪いと決めつけるものは何か・誰か、などが体験的に把握され、常識的理解を超えて「悪い母親」から解放される一瞬に居合わせたことがある。

自分が規定している母親としての私ということを超えて、「今・ここで・～を感じている私」の確立が目指される。子どもと関わることは、変化を創り、変化を受け入れることでもあり、いわば待たなしの関係に入り込むことである。行為している、この場で感じることを言語化することにより演じている自分を対象化し、次のかわりへのヒントを自らが見いだすことに役立つ。

b. 困るのは、困ることではないということに関しての体験的理解が共有・促進される。

子どもの行動に関して困ることの起きた時に、母親が自分の育て方などにひきつけて自分を過度に責めたりすることがある。そのような時に、心理劇では場面化を進める。子どもや母親役をとることにより、困っていることに関して因果的に、私の育て方が悪かっ

た、ととらえなくとも、この状況でどういうことが起きているのか、子どもの発達にそった関わりとはどういうことなのかなど、困ることを現在の状況に关系的・体系的においてみることで、困っていることが対象化され、困るということに困らなくなることが目指されている。たとえば、子どもが泣き叫んだりしてうるさいと感じる時、うるさいと感じること、そのものは困ることではないということが確認され、では、どうするかということに関して状況設定されてロール・プレイングが繰り返される。感想場面では失敗談も含めて子どもと過ごす生活の知恵が披露される。行為する場においては、場面を共有することによりそれぞれの日常生活が細やかに顕在化し、話しやすくなり、「私は」に加えて、「わたしも」「以前は」ということも自由に語り、今につながる「これから」のことへも思いをはせる余裕が生じる。また、演者は観客の発言により自分の日常的かかわりについてのよさにも気づきやすくなっている。

行為法では役割を介して、参加者同士の横の関係が動き出し親近感も育ちやすい。また、カウンセラーが補助自我として、自由自在に子どもや母親の役割を演じていることの効果も大きい。

## 2. V-A クロスプログラムの実際

### (1) グループへの参加経路

グループメンバーは、グループ参加時には、子どもとの関係で、自らが、感情的になり、虐待的(身体的・心理的)なかかわりをしてしまうことに悩んでいることが共通であるが、2つの参加経路から形成されている。1つは、グループを実施している民間の相談機関であるHカウンセリングセンターに自ら来談したメンバーであり、他は、保健所・子ども家庭支援センター・女性センター等からリファーされて来談したメンバーである。本実践研究活動開始時に、いくつかの保健所、児童相談所、子ども家庭支援センター、女性センターにメンバーのリファーを依頼した。

Hカウンセリングセンターに自ら来談したメンバーの主訴は子どもとの関係に悩むというよりもむしろ自らの生き辛さ(具体的には、鬱状態やアルコール問題、夫や姑との関係など)で来談し、カウンセリングの過程で子どもとの暴力的関係あるいは子どもとの関係への否定感などの問題が浮かび上がって本グループ参加に至ったケースが多い。また、リファーされてきたケースは、各センターに様々な形で援助を求め、子どもとの関係の困難を指摘され、本研究グループへの参加を働きかけられ、それを受け入れ参加に至ったものである。

## (2) グループの形態と参加人数

1クール10回のclosedグループである。人数は、6～8名で構成される。これまでの

参加者は26名、クールの参加状況は下表のとおりである。

表1 グループの実施期間と参加者人数

期間	参加者人数	参加者の移動
I期 (2001.10～)	6	クール終了時1名卒業
II期 (2002.1～)	7	クール開始時2名参加 クール終了時2名卒業
III期 (2002.4～)	7	クール開始時1名参加 クール終了時3名卒業
IV期 (2002.7～)	6	クール開始時2名参加 クール終了時1名卒業
V期 (2002.10～)	7	クール開始時2名参加 クール終了時卒業なし
VI期 (2003.1～)	8	クール開始時1名参加 クール終了時2名卒業
VII期 (2003.4～)	8	クール開始時2名参加 クール終了時5名卒業
VIII期 (2003.7～)	8	クール開始時5名参加 クール終了時1名卒業
IX期 (2003.10～)	11	クール開始時4名参加 クール終了時
延	68	

## (3) グループへの参加と終了(「卒業」)

グループセッションに参加する前に、グループ担当者が個別で1～2回面談する。目的は、a.母親の現状を担当者として把握すること、b.グループの枠組みを母親に提示し、理解を得ることの2つである。具体的には、母親の参加に当たっての動機・期待を明らかにし、また、このグループが研究グループであることや参加の条件(時間枠、無料であること、記録をとること、調査等に協力していただくこと)などを話し、グループ参加に関して相互に了解しあうプロセスであり、このプロセスはその後の参加の姿勢を形成するために重要と考え、重視する。

クール終了時に1～2名のメンバーが入れ替わり新しいクールに入る。メンバーの入れ替わりに関しては、メンバー自身からの申し出によるものと、スタッフの判断で面談し、「卒業」とするケースもある。「卒業」に際しては、今後、必要に応じて援助可能である旨伝え、open-endとしている。

## (4) スタッフの構成

1クール(10回)を通してカウンセラー1名、記録者1名が参加した。心理劇セッショ

ンの際には、監督1名が参加し、カウンセラーは補助自我の役割を取って参加した。

## (5) グループセッションの構成

対象とするグループセッションは、2つの方法を組み合わせて展開している(V-Aクロスプログラム)。1クール10回のうち、7回がバーバルセッション、3回を心理劇セッションとしている。2回のバーバルセッション、1回の心理劇セッションを3回繰り返し、最終回はバーバルセッションという形を原則とした(実際にはクールによっては変形も見られた)。

## 3. 結果と考察

これまで3年間に9クール、参加者26名、(延68名)の活動を展開してきた(2001～02年度カウンセラー春原、2003年度は他のカウンセラー、2001～03年度心理劇監督土屋)。その研究成果は、次の項の研究で詳しく述べる。ここでは、第Vクールの終了時に参加者に求めたアンケート(自由記述)をそのままの形で載せ、参加者に成立した体験を考察する。アンケートは、子どもとの関係・自分との関係・夫との関係・親との関係・地



域との関係・グループとの関係の6つの視点を提示し、本プログラムへの参加前とクールを終えた今について感じていることを自由に記述するものである。

### ①子どもとの関係

参加前には「支配」「理想の子育て」「子どもを否定」「自分の悪影響」「罪悪感」「申し訳なさ」「親としての自信のなさ」などの言葉に見られるように、子どもを思い通りにしたいが、そうならないときに感情的に、暴力的に行動し、その結果、自分を責め、親としての自分に自信がないことが述べられている。しかし、クール終了時には、「一緒に」

「子どもがわかってくれた」「子どもの成長する力を信じよう」「自分は子どもを守る存在」「成長が見え出した」「子どもの気持ちを考える」「自分が楽しくなければ子どももきつい」などの子どもとのかかわりへの感じ方の変化と、「自信が持てた」などの自己への感じ方、「手を上げることがめっきり減った」などの自己の行動の変化を捉えている。しかし、「解決までには多くの時間が必要」という表現に見られるように、課題が残っていることもまた自覚されているといえる。

	MERCに参加する前	MERCのクールを終えた今
①	支配していた事に気付かなかった。	支配することが少なくなった。子供の気持ちを考えて励ましたり、慰めたりできるようになった。手を上げることがめっきり減った。
②	理想の子育てをしていた私は子供が思い通りにならないと自分が幼少期からされてきたことを何の抵抗もなく反省しつつも繰り返していた。子供を否定するような言動を取っていた。	親のあり方(本来の)を学んだ。自分の今までの重いがくつがえった。いいお母さんになろうと思って一生懸命だったけど、自分が楽しくなければ子供もキツイことがわかった。支配しないことが少しずつでき始めると著しく子供の成長が見え出した。
③	自分が言ったりしたりすることが何でも悪影響するように思った。	子供の力を信じようと思えるようになった。
④	子供が恐がって顔色ばかり見てた。できるだけ離れていたくてこっちにこないでと思うことが多かった。	一緒に歌を歌ったりお風呂に入れたりできるようになった。子供がお母さんは怒っているとき側に来ないほうがいいとわかってくれた。
⑤	いい関係にはなく、特に下の子とは最悪の状態でした。	子供との問題が見えてきています。まだまだ解決までには多くの時間が必要のようです。
⑥	子供に対し、罪悪感があった。子供を傷つけてしまうということをやめたくてもどうしようもなかった。子供が深いトラウマを負ってしまうんじゃないかと心配でそして申し訳ないという気持ちに縛られていた。	少し洗濯幅ができたように思う。子供の成長する力を信じたいと思った。
⑦	親だという自信がなかった。	自分が子供を守る存在に気付いた。自信を持てた。

## ②自分との関係

参加前には、「自分の気持ちがわからない」「わけのわからない存在」などのように、自分の状態に内在し、不全感を持ちながら生活し、疲れ果てている様子が見える。また、「こうしなければいけない」「人にどう思われるか」などに縛られ、そして、「不要な人

間」の表現にみられるように自己肯定感が低いことも窺える。そして、終了時には、「自分の気持ちの整理ができた」に見られるように、自己内接化が進み、「自分を責めなくていいんだ」「私が必要な作業」「できることはやれる」など、自己肯定感が増している。

	MERCに参加する前	MERCのクールを終えた今
①	自分の気持ちが分からなかった。威張っていて自分もきつかった。(弱点を出せなかった)	自分の気持ちが整理できた。何がしたいのかわかった。どうしたらいいのか考えるようになった。少しずつ自信が持てるようになった。
②	いつも精神的に弱いところがあり、自分に自信がなかった。“人にどう思われるか”で生きていたので必要以上に周りに気を遣いエネルギーが空回りして疲れ果てていた。	自分は悪くなかったんだと少しずつ思えるようになってきた。自分を責めなくていいんだと。言いたいことを言うのもその時私が必要な作業だと。認めてもらったこと、わかってもらったことが、自分の問題消化につながった。
③	“こうしなければいけない”ということにこだわりすぎていた。	少しずつこだわらなくなってきた。
④	死にたくて仕方なかった。どこか遠くで安らかになりたかった。自分がとても嫌いだった。役立たずで人に迷惑ばかりかけて不要な人間だと思った。	私は保育園に子供を送り迎えしてできることはやれるようになった。料理も、土日ははりきって作ることもある。少しだけ前向きになれた。
⑤	自分のことがわかっていない状態なので何をしても常にイライラ状態。何かに追いかられるような気持ち。つねに落ち着かない気分です。	気分的には落ち着きました。内面的な自分の問題が見えて着きました。でもそれもまだまだ時間が解決には必要のようです。
⑥	わけのわからない存在で、どう扱ってよいか手を余していた。	自分がどういうタッチで、くせを持っているかが分かって、扱い方が上手になってきた。

### ③夫との関係

夫との関係には個人差が大きいことが捉えられるが、終了時を見ると、それぞれに関

係自体の変化や、関係への自己の姿勢が明確になるなどの変化が捉えられる。

	M E R Cに参加する前	M E R Cのクールを終えた今
①	支配する、されるの関係である事が分からなく、よくケンカしていた。暴力を受けたり(言葉)もした。	対等な関係になりつつある。相手に対してきちんと自分の意見や、気持ちが言えるようになった。口で言えるようになった。
②	メルクで言われるコメントを夫は客観的に私に言い続けてくれていた。だけど“母親なのに”“大人なのに”ということと言われるので素直に吸収することが出来なかった。	ACだと分かり、自分の不満を口に出して繰り返し言うことが解消と消化につながることを理解してくれて、今は批判的にならず私を受けとめようとしてくれる。 メルクは私にとっても子供たちにとっても大事なところだと理解している。
③	関係は良いと思っていた	もう少し自分の考えをはっきり言ってもいいと思った。もっと理解してほしいという気持ちができる
④	自分をどう思っているかがとても不安で、キラわれるてるか心配だった。リコンした方がいいかとも思って、だれかいい人いないのかきいてた。	私がどうしたいかをすごく大切にしてくれて、具合が悪いときも文句も言わずに子供たちをつれてってくれる。1日も子供をつれてって遊びに行くので、時々、私も一緒にいける。
⑤	夫にむかって大規模な怒りをぶついたりとつねに定期的に怒りをぶつけていました。ただ受けとめてくれるタイプだった為けんか状態になることもありませんでした。	まだまだ怒りをぶつけてしまったりしていますが、夫自身は私のことをとても理解してくれているので関係はよいです。
⑥	ごちゃごちゃとしたわけわからない感じ、別れたいけど別れられない。	別れよう、やっぱり別れたい、1からやり直したいと思った。
⑦	ストレスの原因。恐怖のかたまりで一方的に私が悪者。	イラつく事を言われても、少し受け流せるようになり、私が悪者でないことも分かった。

#### ④親との関係

参加前の、親との関係においては、「大きな存在」「常に支配される感じ」「絶対の存在」と支配関係を感じていた人が4人、「憎みながらも頼りたい」というアンビパレントな関係と「普通の親子関係とっていた」とする人、また、「本当の自分になれる唯一の

存在」と肯定的な感じ方をしている人がそれぞれ1人であった。終了時には、それぞれに整理が進み、親との関係に対する認知的側面、行為的側面での外接化への変化が捉えられる。外接化は、関係内在における困難性から脱却するプロセスとして重要であると考え

	MERCに参加する前	MERCのクールを終えた今
①	親がとても大きな存在だった、親から支配をされていた事に全く気づいてなかった。とてもこわかった。	親の存在はとても小さくなりひとりの老人のように思えてきた。こわくなくなった。親にも意見や主張できるようになった。
②	つらい思いがたくさんある中、頭の中でグルグル回るだけで整理ができてなかった。目の前に居なくても常に支配されている感じがしてそのルールにのっとって行動していたのでまき込まれてキツかった。	先々週の棚卸しは私にとって効果大だった。ちょっと前まで多感で涙もろかった私が親との関係にしっかりと区切りをつけられたような気がする。自分に悪い影響を与えられることを恐れて会わずに居たが、会う気持ちにもなり始めてるし、会っても振り回されない気がする。
③	にくみながらもたよりたい気持ち	少しずつ自立できてるかなと思う。
④	自分の親とはあんまりかわってなくて、よく連絡をとって本当の自分になれる唯一の存在。	義父母から干渉されて、つき合いがイヤでたまらなかった。Telがなくなってきてほっといてくれるようになった。出たくない時があることもわかってくれた。いろいろ送ってくれる(うれしい物もイヤなものもあるが)
⑤	とてもよい親子関係とまで言えなくても普通の親子関係だと思っていました	いろいろ感じる部分はあったのだなあと思いますが、それに対して少しずつ幼少の時の自分のつらさが見えてきました。
⑥	××のワークに何年もずっと参加していて、親とのことを整理し、親に対し、変って欲しい、わかって欲しいと思っていた。けれど、それはむなしい努力だと思い、N先生の本を読んでいるとき、「会わない」という選択もできると思い、縁を切った。	実際の親と会わなくても、その影響はずっと残ってしまう。××才になった今も、支配されてしまう。支配されたくなくてもどうしようもない、けれど、1週間に1度でもここで「あなたはいい存在じゃない。大切な存在なんだ」と言ってもらえるだけでも薬のような効果があった。
⑦	親は絶対の存在。支配者で命令されれば、それに従う。	少しずつ「イヤッ」という事を言えるようになった。

### ⑤地域との関係

現代の子育て中の母親に関しては、地域からの孤立という側面が指摘されている。参加前の感じ方の中では、「人の視線が気になる」「他者にどう思われているか、気になる」など、他者からの評価に敏感な状態が見受けられる。そして、「なるべく接触しない」とい

う姿勢で自分を守っている。終了時には、「今でも気にはなる」が、「自分は自分」「自分をしっかり持てる」ことで少しずつ「気にならなくなってきた」ということが表現されている。そして、地域の援助を受けることもでき始めている。

	MERCに参加する前	MERCのクールを終えた今
①	人の視線がとても気になった。	自分は自分と思える様になった。生活が楽になった。
②	他人が何とおもっているのか、私がどう思われているのか心配で、気になっていて自信が無かった。だからあたりさわりのない関係で（あいさつ程度）ビクビクしていた。	今でも相変わらず人の言動は気になったりするが、以前に比べて自分をしっかりもてる気がする。自分も思っていることが人の評価が気になって言えなかったが少しずつ自信が持てる気がする。
③	学校での母親たちとの関係を気にしていた。	今でも気になる。半分気にしなくてもいいと思うところもある。
④	人の目ばかり気にしていい人になろうとしていた。気ばかりつかって、人と会うのがきつかった。	目が合えばあいさつすればいいしというかんじで、別に気にならなくなってきた。
⑤	あいさつ、おしゃべりなどははしていました。	あいさつやおしゃべりなどはしています。
⑥	ずっと24時間子どもと一緒にいるという関係。たまに公園、児童館へ行くが、友だちなんてできない。	週1回××市のファミリーサポートで紹介された近所の方が、子どもをあずかってくれるようになった。
⑦	必要のない存在で、なるべく接触しないでした。	色々な方と話しが出来るようになった反面、近付くのを恐いと思っている。

## ⑥グループとの関係

参加前にそれぞれが描いていたグループ像がある。「自分がしてきたことを暴露し、たしなめられたり、注意を受けるところ」のように、グループは、指導されるというイメージが強い。また、「集団は苦手」だったり、「ほかの人の話を聞いて・・・自分自身の問題の解決になるのだろうか」という疑問、「不

安で、戦場へ行くような気持ち」「理解されないのでは」といった不安も表現されている。しかし、終了時には、「共通点」「共感」などの言葉が数多く見られ、「聞いてもらうことの大切さ」「認めてもらった」など、自分にとっての集団の意味を捉えている。

	MERCに参加する前	MERCのクールを終えた今
①	グループカウンセリングって何？それで自分の問題が解決するの？個人のほうがいいんじゃない？って思っていました。反面、おもしろそう、楽しそう、友だち出来るかも、ランチにいける友だち（同じ仲間）を見つきたい。と思いました。	個人ではないもの。他人の問題に見えて共通点は多く、とてもびっくりした。勉強になる事が多く、友だちが出来たりして楽しく?!なってきた。たくさんの人に聞いてもらう事の大切さを学んだ。聞く事も学んだ。
②	生育歴にも書いたが、自分がしてきたことを暴露し、たしなめられたり、注意をうけることだと思っていた。	私の全部を辛い私の全部をわかってくれる。“大変だったね”と一生懸命生きてきたこと認めてもらった。“できなくてもイイ”“やらなくてもイイ”今まで自分で買ってきたことをくつがえしてくれて気持ちを180度転換させてもらった。すごくすくわれた。有難うございました。
③	集団が苦手なので大丈夫かと思った。	その場にいるのは不快ではないが不完全燃焼という感じがいつも残る。
④	初めは私だけノーテンキで他の人はみんな深刻な悩みをかかえていて、私なんかに参加していいのかなぁと思った。	悩んでいることにはかわりなく、共感する部分も多かったので少しかわれてよかったと思う。自分は、なぜつらいのかよくわからないけれど、他の人のつらさは本当に大変だなぁと思う。
⑤	他の人に話しを聞いて本当に自分自身の問題解決になるのだろうかと思いました。	いろいろな部分でかさなる所があるものだなぁと思いました。
⑥	この会に参加し続けられるか不安だった。外出するのも不安で、戦場へ行くような気持ちになってしまう。	とても共感することが多く、自分を客観的に見られた。まだまだ始まったばかりで、山あり谷ありという感じ。
⑦	本当に同じような悩みを持っているか疑問だった。理解されないのではと思った。	恐かったのがウソのようで、他の人の意見で私も気付いたりして、一步步前進しているようです。

#### 4. おわりに

子どもへのかかわり方に悩む母親たちへの支援活動は、母親たちの過去の体験から形成されてきた『自分の物語』の書き換えという課題と同時に、子どもとの関係を担っている現実においてどうふるまっていくか、そのふるまいを自己がどう受け止めていくかという課題が並行・交差しながら展開していく。V-Aクロスプログラムはバーバルセッションにおける自己認知の否定性から肯定性への変容を縦系に、心理劇において、今、ここで、状況体験の他者との共有と、今、ここの自己の関係体験の意識化を横系に、新たな自分らしさを織り成していく作業であり、それが日常的な生活状況における自己の情緒の安定と多様な認知の仕方の成立・行為の仕方の変容につながっていく。V-Aクロスプログラムという情緒・認知と行為の統合的援助技法が果たす役割は大きいと考える。

研究協力者：水流恵子

#### 参考文献：

- 広岡智子 2001 虐待問題を抱える母親へのアプローチ—自助グループ「母と子の関係を考える会」MCGの試み— 社会福祉研究、第82号 鉄道弘済会社会福祉部
- 広岡智子 2001 虐待問題を抱える母親へのアプローチ—MCGの活動の意味と実際— 小児看護 12月号 へるす出版
- 野口啓示 2003 ペアレント・トレーニング 世界の児童と母性 Vol.55 資生堂社会福祉事業財団
- 森田ゆり 2003 子どもの虐待・DVハイリスクの親の回復支援：MY TREEプログラム 生活教育 1月号、へるす出版
- 武藤安子・信田さよ子・春原由紀・土屋明美 虐待に対する援助のフォーマット作成に関する研究、平成13年度厚生科学研究(子ども家庭総合研究事業)報告書、2002
- 同上：平成14年度厚生科学研究(子ども家庭総合研究事業)報告書、2003
- 信田さよ子 2002 DVと虐待—『家族の暴力』に援助者ができること、医学書院
- 春原由紀 2001 Abuse(虐待)を課題とする母親たちとのグループカウンセリング 人間関係学研究 8巻1号
- 信田さよ子 2002 幼児虐待が援助者に提起するもの：藤崎ほか編著『育児・保育現場での発達とその支援5』、ミネルヴァ書房
- 春原由紀 2002 親へのグループアプローチ：宮田恵一編著：虐待へのブリーフセラピー、金剛出版

### Ⅲ 虐待に悩む親との臨床的アプローチの有効性 —グループプロセスにおけるメンバーの課題意識の構造—

武藤 安子      春原 由紀      土屋 明美      信田 さよ子  
(横浜国立大学) (武蔵野大学) (相州病院) (原宿カウンセリングセンター)

#### 1. 研究の目的

子ども虐待に悩む保護者への支援プログラム開発のために、評価と効果的な指導につなげるための援助プログラムのガイドライン作成が児童相談所、児童福祉施設等の諸機関において活発に進められ実用化されてきている（厚生科学研究 2002、2003）。しかし、これまでは親子分離を必要とするような危機介入のケースマネジメントにおける検討が主であり、それらのケースを含めて、子ども虐待に悩む保護者への心理臨床的援助に関しては、評価や援助技法についても援助者の側からの体験的・事例的報告がほとんどである。事例的報告は貴重である。しかし次の二つのことを前提にして本テーマにかかわる心理臨床研究がなされる必要があると考える。一つは、心理臨床的援助のプロセスにおいて、虐待に悩む保護者である当事者自身が実際に表出した言葉や行為を丁寧に収集し、調査や事例研究で援助者の側から把握している角度からは得にくい当事者の心的世界の全体に接近しようと努力をしていく必要があること。二つは、臨床活動におけるプロセスの中で見いだされるメンバー（クライアント）の心的世界を読み解き、概念化していくためには、その臨床活動がどのような理論的・技法的枠組みに支えられ、あるいは基盤としてなされているのかが問われなければならないこと。これら二つの視点を再び活動の指針として生かしていくという理論・技法・実践の相即的な作業が心理臨床研究においては重要だからである。この前提に基づき、本報告のⅠでは、子ども虐待に悩む保護者との支援プログラムとして提示する

V-A クロスプログラムの基本的な姿勢について論じ、またⅡでは、「関係学」に基盤をおく臨床的枠組みとそれに基づいて展開された具体的な実践内容について述べてきた。

本稿では、実践されてきたグループプロセスにおいてメンバーにより実際に語られた発話内容を分析し、メンバーの課題意識の構造を明らかにすることによって、V-A クロスプログラムの効果について検討し、子ども虐待に悩む保護者への援助に役立てることを目的とする。

なお、ここでいう「課題」とは、個人において解決されなければならない「問題」や「主訴」という意味ではなく、「個人をとりまく関係のあり方に成立している課題であり、関係状況の発展において課題解決の方向を見いだすことができる。」（土屋 2001）という関係学に基づく治療的関係において用いられることばである。

#### 2. 研究の方法

(1) 対象および期間：＜研究 1＞に述べられた期間の第Ⅰ期（2001年10月～12月）の1クール10回のうち7回のバーバルセッションにおいて6名のメンバーによって発話された内容である。1クールすべてのセッションを対象にしたのは、メンバーが参加時には相互に面識がなく、居住地（首都圏内）、メンバーの年齢（30代が3名、40代2名、50代1名）、子どもの数（3人が2名、2人3名、1人1名）、子どもの年齢（10歳以下が9人、10代1人、20代2人）などの家庭状況も異なり、一定期間の継続を経て得られた発話内容は、当該研究の保護者の幅輻してい



る課題意識の構造を全体的に把握することが可能であろうと考えたからである。なお、考察の段階では、第Ⅱ以降も継続されているグループセッションの展開も参考にした。

(2) 手続き：メンバーの了解をとったうえで同席している記録者がその場で発話内容を記録した。分析の対象としたのは、バーバルセッション全回において6名のメンバーによって発話された全ての発話内容である。V-Aクロスプログラムの方法の特色から、カウンセラーの発話は分析の対象からはずした。multiple counseling 技法においてはメンバー間相互のコミュニケーションは行わないため、グループにおいては独立した発話とみなすことができる。

(3) 分析の枠組み作り：意味内容を吟味して分析するためのエピソードを抜き出した。この際、なるべく多くのエピソードが収集できるよう細かく抜き出すよう心がけた。収集されたエピソードは、セッションの第1回262、第2回377、第4回317、第5回242、第6回286、第9回170、第10回258の計1912であった。これらのエピソードを計115カテゴリに分類した上で、出現回数の少ないカテゴリを見直す作業を繰り返し計47カテゴリを抽出した。分類作業はKJ法に準拠した方法を用いた。具体的には、はじめに小さなグループをつくり、さらに上位グループにまとめていくことを繰り返し命名した。その際、担当カウンセラーも参加しできるだけ発話内容のニュアンスも活かすよう留意した。

### 3. 結果および考察

#### (1) 全体の発話内容

本研究の対象となるグループプロセスの発話内容の全体（1912のエピソード）の傾向を把握するために、抽出した47の47のカテゴリを5つのテーマに分けて頻度を算出した。まず〈自分自身について〉は26.4%、〈子どもとの関係について〉22.9%、〈夫・姑など家族との関係について〉20.4%、〈友人・社会における人間関係について〉11.7%、〈自分に生育過程について〉8.9%、〈いま・このグループについて〉7.3%、〈その他〉2.4%である。このグループが何よりも自分について、そして自分との関係における子ども、家族、その他の人間関係について、いま・ここでの人間関係体験をベースにしなが、過去を振り返る機会の多彩な語りの場であるということがうかがえるものである。

#### (2) 47カテゴリの具体的内容

47カテゴリの具体的な内容を5つにテーマ別に次に示す。なお、発話の表現はなるべくそのまま活かすようにしてあるが、個人を特定しうるような具体的な内容は省略または一般的な表現に置き換えた。(ex.妹→下の子ども) これらの内容は、保護者の主訴でもないし、実態そのものではなく、ましてや解決しなければならぬ問題だけでもない。「あった、した、思った」(過去)であるとともに、「ある、している、思う」(現在)でもあるし、さらに「ありたい、したい、思いたい」(未来または願望)でもあるという、まさしく個人をとりまく関係のあり方に成立している輻輳している保護者の課題意識の総体ということが出来るであろう。

## 自分自身について

### 1.自分を大切にすること

自分をちゃんと生きていかないと。  
子どもを大切にするには自分も大切にしないと。  
自分の喜び、苦しみは自分で引き受けて感じたいし。

### 2.完璧でなくてもいい

最低限のことだけやってたら、もういいやって。  
完璧じゃなくていいと思えた。  
楽に生きていく中でいろんなことが見えてくるんだろうなと。

### 3.自分なりのやり方でいい

この頃子どもとのやり取りが楽になってきた。  
私なりのやり方でやっていこうかなと大きな力をもらった感じ。  
自分の方がことばに出来なくて子どもに負けてたんだ。

### 4.子どもに対する行動への自責

授業参観だったのに私は遊びに行っていて帰ってきたら子どもが待っていて。  
「ママ、ごめんなさい」って子どもが泣いているのが聞こえる。  
子どもが目を瞑る、耳をふさぐ、防衛的なことをするまでやってしまう。  
「どうせいらぬ子なんだ。」と言うってしまう。

### 5.子育てへの振り返り

他の人の話は、自分の子育てのつらさを思い出して私も通っていた道だなあって。  
昔なら怒って子どもを殴るか（おもちゃを）捨てるかしてた。  
前だったら、怒って全部一人で責任を取らせていた。

### 6.自分の不適切な養育

本当にきちんと育てなきゃって思って厳しくやってきた。  
お母さんは行かないから行くならあなただけだから行って、と。  
任せるいいながらも、毎日こうやいなさいとメモに書く。

### 7.好きでない自分の性格

私は言うか言わないか白黒でその間がなかった。  
私が自分に自信がなくて。  
私には何にもとりえがない。

### 8.子どもへの押さえられない怒り

怒っている時間が（自分は）長いんで。  
振り向かないとかしててそれが怒りに変わっていた。  
買うって言ったんだから最後まで飲めって3歳の子どもに責任をとらせる。  
汚い手でさわらないでって1週間に2回ぐらいはあって。

### 9.子どもへの愛情

かわいいと思ったこともあった。  
下の子なんか、飽きるまで接してあげられる。  
後でもらった写真見てかわいいと思ったんですけど、  
損しちゃったな、こんなに可愛かったのに。

## 10.子どもへの拒否的な感情

自分と子どもが別れたほうが互いに幸せな社会生活を送れるんじゃないかって。

子どもにすべてを支配されている感じがする。

男の子だったから好きになれなかった。

子どもと一緒にいるのはもういやっていうか疲れきる。

## 11.イライラする感情

何をしてもイライラして止まらない。

今週は、いらいらする1週間で

だらしがないところを見せつけられるとイライラする。

まだ、感情的なコントロールが難しい。

## 12.変わりたい自分

助けを借りないで早く自分の力でやっていけるようになればいいな。

お風呂が溢れてもそこで気づけばいいことで、と。

生き方を変えようというか、そういうことを考えてまだ問がない。

## 子どもとの関係について

### 13.子どもとのやりとりがある

ちゃんと夫を選ばなかったの？とかいってくる。

今は子どもといいキャッチボールができてきているから。

1つのことが話し合える家族っていいな。

自分の言動におどおどしてた。子どもはづけづけ入ってくるなって。

### 14.子どもとの共感がある

子どもの話に「そういう変な人もいるんだよ。」と共感するようにしている。

いじめにあった子どもに無視しないでって言ってきなって言った

抱っこ、抱っこって来るとたいてい応じるようにした。

### 15.子どもの強い自己主張

私の言うことに反発するばかりで。

どこかに連れて行ってくれとか、あれ買ってくれとかきかない。

きょうだい喧嘩のときに、口をはさむなって抵抗する。

### 16.子どもから支えられたこと

そうやって今までやってきたじゃないと子どもに救われた。

家族のつながりなのかな感じた。

子どもががいなくても私の成長はあったかもしれないが、きっかけをもらっている。

### 17.子どもへの接し方の難しさ

子どもとの接し方で悩んでしまうことばかり。

子どもに振り回されて全部付き合ったら何もできない。

子どもの気持ちが考えられない、私になめられているのではないか。

私の中にキャッチボールできる余裕がない。

### 18.子どもからの甘えの要求

四六時中でも甘えてくるからそれに応えてられない。

遊ぶのもママと、テレビ見るのもママとべったりしてくる。

子どもが「自分をを見て」「待って」って言っているのはわかるけれど。

#### 19. 気がかりな子どもの性質

子どもにカッとなりやすい暴力的な面を感じて。

何度言っても感じないみたいで少し気がついてくれればいいのに。

結構溜め込んじゃうみたいで。

みんなの注意を受けながらついていくのが精一杯で。

#### 20. きょうだい間のもめごと

上の子がしたの下の子に手厳しい。

上の子が下の子に焼きもちを焼く。

きょうだい喧嘩を叱ってそれを上の子が怒ってその悪循環のパターン。

#### 21. 子どものありのままの受容

子どもにとってはこんなことは大したことじゃないんだろうけど。

この子はこの年齢なんだと思って見ると自然なことなのかもしれない。

この子ぐらいの年は何で怒っているのか理解できないこともあるだろう。

子どももストレス溜まっているんだなって思って。

#### 22. 子どもの成長への気付き

もう黙っていれば自分でやる時期なので。

子どもにも責任感というのがあったらしく、ここまで育ったなど。

少しずつは言うこと聞いてくれるようになってきているから。

ちゃんとやるからって怒りながら言っていました。

#### 23. 子どもの困った行動

洋服にこぼすとか洗濯物をださない、おもちゃを片付けない。

わめいて待てない子だから。

私のちょっとした対応がムカッと来るらしくて。

結構溜めてしまってあとで爆発するんです。

#### 24. 体罰を行ってしまう

手をあげてもたたいてもきかない。

先週は久しぶりに子どもに手をあげて。

保育園の先生に子どもの悪いことを言われ、子を連れて帰って玄関を閉めたらすぐに殴るけるで。

あんまりひどいんで頭をやっちゃった。

#### 25. 子どもとの適度な距離をとること

産んで育てるのは自分だけど、子どもは別の人生と。

子どもが困った時に言ってくれば教えればいいと思っている。

このぐらいの距離が一番いい。

子どもを遮断すると子どもは1人で何かやりだすのが面白い。

子どもに支配的で、子どもが自由に飛び出すときに飛び出せなくなるんじゃないかって。